

新年のご挨拶

日高農業改良普及センター所長 江森 健 司



おります。

牧草は、一番草・二番草ともに断続的な降雨により乾燥が進まず、収穫時期や圃場によつては、収量・品質に大きな差が見られました。サイレージ用トウモロコシは、春先の播種が遅れたものの、夏場の高温により登熟が順調に進み、良好なサイレージ用トウモロコシが生産されました。

地域の特産であるミニトマトは、夏場の高温により草勢が低下し、やや低収量となったものの品質が良く、市場価格の高騰にも支えられ、過去最高の販売結果だと聞いております。

肉牛は、4月に宮崎県で発生した口蹄疫の影響が懸念されたものの、静内産黒毛和牛は、素牛が市場で高い評価を受けて販売されており

一方、軽種馬は地方競馬の衰退や景気低迷により市場価格が下落し、経営を圧迫するなど取り巻く環境が悪化しており、今後、強い馬づくりとともに経営体質の強化、経営の複合化・経営転換の取り組みについて、関係者がより一層力

を合わせて進めていくことが求められております。

今、地域の農業・農村は大きな転換期を迎えています。

国際的には、WTO農業交渉や日豪EPA交渉は進展していないものの、関税が原則完全撤廃となるTPPへの参加の検討が本格化しており、地域でも大きな影響が出ることを危惧しているところがあります。

また、国の農政も大きく変わり、食料自給率の向上や農業・農村の六次産業化等を目指した「食料・農業・農村基本計画」の見直しが行われ、「戸別所得補償制度」は、本年度から畑作を含む本格実施に向けた取り組みが進められております。

当普及センターでは、昨年から地域農業の維持と農村の活性化を支援するために、人材育成、情報・クリーン・有機、合理化・組織化、高付加価値化をそれぞれ担当する新しい部署が配置されました。

地産地消の取り組みや異業種との連携による付加価値の高い産地ブランドづくり、多様な担い手の育成及び確保・支援、そして、食の安全・安心に配慮し、環境に調和した農業の推進など「担い手が安心して残れる」地域づくりを目

指した活動を進めてまいりますので、宜しくお願い致します。本年が、皆様にとりまして、希望に満ちた年となり、地域にとつて豊穡の年となりますことをご祈念申し上げます。年頭のご挨拶と致します。



、水稲は全道作況指数98に對しまして、日高は地域差はありましたが、作況指数101と平年並みを確保出来ました。また、デビュー二年目を迎えた「ゆめぴりか」は、タンパク値がやや高いものの、アミノ酸値が低く、食味の良い米が生産されて